



いつも“斜め上向き”で、 成長し続けたい

日本アイ・ビー・エム株式会社
グローバル・テクノロジー・サービス事業
アドバンスド・オートメーション
シニア・アーキテクト

青山 真巳
Manami Aoyama

青山真巳はアーキテクトとして、Server Lifecycle Automation (SLA) の日本における設計・展開を推進している。「エンドユーザーが直接触れるアプリケーションに対して、インフラは表には見えません。けれど、システムの根幹を支えるインフラのイノベーションこそがクライアント・ファーストの鍵を握ります。それを実現するのがインフラのオートメーションです」との自負をもって、インフラ関連の業務に従事してきた。

仕事の現場ではもちろん、日常生活の一場面でも、裏で動いているインフラの構成を考えてしまう。「流通業界を長く担当していたこともあり、スーパーでレジ待ちをしながら、『レジを打つと売上情報が更新されて、在庫が一つ引かれて……』とか、裏側の仕組みや、そのシステムを作った人や運用している人のことまで考えてしまいます。今はオートメーションやクラウドの仕事に携わっているので、『どうすればもっと楽に、効率よくなるのだろう』と、考える視点が少し変わってきました」

普通の人からすると、なんでもない日常生活の一場面も、青山にとっては新たな発見や気づきの場となるようだ。

* * *

青山のキャリアには、2つの大きな転機があった。1つは2007年、ITスペシャリストからアーキテクトへの職種変更であった。

「若手の頃は、AIXやストレージシステム的设计・構築・運用などを行っていました。冗長化構成を作るプロセスが好きで、どんな障害が起きても絶対に止まらないシステム設計を考えていました。自分が考えた設計がうまくはまり、想定通りの結果を生み出すのが、とても気持ちがいいのです。幅広い知識を組み合わせ、最適なシステムの全体設計図を描くことが求められるアーキテクトの仕事は自分に向いていると思いました」

次の転機は4年後の2011年。アーキテクトとしてキャリアを積んだタイミングで、入社以来ずっと希望していた海外での仕事の機会を掴み、ニューヨークへの赴任が決まった。グローバルでクラウド・マネージド・サービスを立ち上げるプロジェクトで、唯一の日本人としてインフラ・アーキテクト・チームに配属された。

だが、いざグローバル・チームの中に入ると自分の力が未熟であることを痛感する。設計の矛盾点を指摘しようにも、ビジネス英語の不自由さが邪魔をして思うように伝えられず、悔しい思いをしたこともあった。クラウドの最先端技術を目の当たりにして、圧倒的な技術を持つ人が数多く集まっていたことも、自信を失わせる要因の一つだった。

壁にぶつかった青山に、当時の上司がこう声をかけてくれた。「あなたならできると思ってここに送られてきたのだから、まずは自信を持って。そして今自分ができることをしっかりやりなさい」

インフラ・リノベーションの匠たくみ

気負わなくてよい、自分ができていることを精一杯やることがチームのためになる——そう気づき全力で仕事に邁進した。「精一杯力を出して設計したアーキテクチャーを世に出し、やりきったことは、私のキャリアにとって非常に大きな経験となりました」と、当時の経験を振り返る。

ニューヨークでの経験をきっかけに、仕事への向き合い方も変化した。「あるカンファレンスで女性リーダーが言っていた『What am I known for(自分は周りからどのように知られたいかを意識しなさい)』という言葉が、今でも胸に響いています。自分がやりたい一心で目の前の仕事をするだけでなく、これからは他の誰にも負けない何かを持つべきだと気づききっかけになった言葉です」以来、現在では、グローバル・テクノロジー・サービス事業(GTS)でSLAのSMEとして、IS Delivery Champion(aaS Integrationカテゴリ)に任命されている。

* * *

自らのキャリアを切り拓く一方で、TEC-J(グローバル・テクニカル・コミュニティーの日本支部)やJTC(若手技術者コミュニティー)といった社内のコミュニティー活動にも力を入れてきた。「コミュニティーには卓越した技術を持つ人たちがいて、とても刺激を受けます。以前はさまざまな組織の人たちと出会って活動することがただ楽しかったのですが、いまは自分が周りにいい影響を与えられるように、自分が楽しんでいる姿を見せて後進の人たちが楽しんで参加してくれるようにということを心がけています」

青山がいま熱心に取り組んでいるのが、女性技術者育成を目的としたコミュニティー「COSMOS」のコアメンバーとしての活動だ。「ひと昔前は、女性が仕事をバリバリこなすには家庭を犠牲にせざるを得ないという風潮もあったと思います。でも、今は違います。未婚と既婚、子供の有無を問わず、自分の大切なものを失うことなく、キャリアアップできることを目指しています」

COSMOSの活動が話題になると「とにかく楽しい！」と即答する青山。その表情は、いっそう朗らかになる。「COSMOSのメンバーを見ていると、みんなキラキラしているなと感じます。女性特有の美しさという点だけではなく、とても楽しそうに活動しています。昨年は、高校生・大学生のリケジョ向けにIBMの取り組みをアピールしたり、産学官連携で女性技術者育成のワークショップ

や提言をしたり、社内にとどまらず、外部向けの活動や交流も行ってきました」

* * *

業務もコミュニティー活動も全力で取り組む青山だが、プライベートも積極的だ。「リーダーになったときに、自分がしっかり休みをとらないとメンバーも休みづらいたらうと思って。休めるときに自ら率先して休みを取るようになるうちに、自然と公私のメリハリがついてきました」

最近の楽しみは食べ歩き。得意先の近くにある美味しい店はチェック済みだし、出張時にも事前のリサーチを欠かさない。

仕事もプライベートも、全力で楽しもうと行動するのが、青山流なのだ。「ただ前向きだけでなく、斜め上を見ていたい。自分が追いつめる技術面はもっと知見を深めていきたい。常に成長し続けて、変化が速い技術の世界に喰らいついていけないといけない」と、貪欲だ。

「私が職場やコミュニティーで楽しく仕事ができているのは、周りの人たちに恵まれているからです。自分の成長が止まると会社や社会への貢献ができなくなってしまう。だからこそ、いつも斜め上向きで、何らかの分野で誰にも負けない存在になりたいと思っています」

多彩な経験を積んだ今もなお、青山の挑戦は続いていく。



(上段)COSMOSの定例ミーティングでコアメンバーと
(下段左)ニューヨーク、ブロードウェイ・ミュージカル「ヘドウィッグ」にて
(下段右)エストニアの首都タリン、古い教会のつべんからの町並み